

近代化で変わらなくなった 霊能者の姿を追う

日本のシャーマニズムの伝統は
今も息づいている



神話に登場する天安河原が宮崎県の高千穂町にあると伝えられている。やはり非常に印象的なところであった

写真提供：筆者

ヤニス・ガイタニディス●ギリシャ生まれ。アフリカ、ヨーロッパを転々とし、現在、英国リーズ大学大学院で霊能者の社会医療的役割について研究を行なっている

岩戸神話によると、ある日、太陽神アマテラスオオミカミは天岩屋の戸を開

き、中に閉じこもってしまった。太陽がなくなつたため、世界が闇に包まれた。困つた八百万の神々は、天安河原に集まり、アマテラスを外へ出すための儀式を考えた。日本のシャーマニズムと神楽の起源として言われているのは、その儀式でのアメノウズメの神憑りとおもしろおかしい踊りである。

シャーマニズムは17世紀のヨーロッパ人に観察されたシベリアのツングース系民族の宗教者サマンからつくられた言葉であり、20世紀にはオリジナルなシャーマンに似ている世界中の呪術―宗教的職能者を示す学術用語として日本でも使用されてきた。

日本のシャーマンといえば、東北のイタコか沖縄県のユタが有名だが、実は各県で活動しているシャーマンもいる。このような人は通常、意識の変性状態において、神霊、精霊などと直接交流する能力を持っていると信じられている。というところ、最近流行っている江原啓之のようなスピリチュアルカウンセラーと共通点があるようにも思われるが、近年の日本ではシャーマンより「霊能者」という言葉がよりふさわしいと考える研究者もいる。

日本のシャーマニズムの発祥地に 霊能者を訪ねる

私は昔から、人間がなぜ超自然の不可思議な現象に磁石のように常に引かれてしまふのかということに興味を持っていた。修士課程で東南アジアにおけるシャーマニズムを勉強したあと、博士課程の学生として、日本での霊能者の社会的役割という研究テーマを決めた。

ワールドワーカーは始まったばかりだが、今まで何人かの霊能者に会うことができ、「博士課程は予想以上に時間かかるよ」とか「前世は小学校の先生だったね」など、いろいろなことを神々や守護霊に霊能者経由で教えても

らつた。それを信じる信じないにかかわらず、クライアントが霊能者との相談の結果をどのように受け取るかを研究したいと思っている。そのため、神話による日本のシャーマニズムの発祥地である宮崎県の延岡・西臼杵エリアを訪れたのである。

神話のアメノウズメが舞つたとされることから車で30分離れた延岡市郊外にある蛇谷の山に、霊能者Nさんが住んでいる。蛇谷は江戸時代以来、雨乞い祈願が行なわれてきた場所、いくつもの地元の神話に語られ、昔から行者が好む場所として知られている。

弘法大師、不動明王、龍神の霊場である蛇谷の擁護者になつたNさんは50年前、山の神々の声を聞き始め、蛇谷を管理しながら、地元の人のために予言したり、祭儀をしたりしてきた。近代化と同時に電話でも相談に乗れるようになったNさんは年3回の蛇谷の祭りを行ないはじめ、昨年は大阪からも信者が参加し、合計500人以上を集めたという。近代化により日本のシャーマニズムは変わってきた。新しいタイプの霊能者が現れる間にも、伝統的な霊能者も変化する。その現象を分析するのが、私の研究の大事な一部なのである。